

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	上級段階における外国語（英語）の指導法
Auther(s)	岡田, 久
Citation	ニダバ , 8 : 43 - 50
Issue Date	1979-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046390
Right	
Relation	



上級段階における外国語（英語）の指導法

岡 田 久

初期段階においては、正しく音声をとらえ、反射的に口の外にだすという学習態度の養成につとめてきた。

中期段階においては、倦怠期をむかえるということも考慮して、興味ある教材、例えば、図示式による指導や、絵を通しての練習、又は歌唱指導などを組み入れたりして、学習者達に、“やってみよう”という意欲をおこさせるように指導してきた。反復練習をもとにして、自分の力で意志の表現が出来るように努力させてきた。

さて、上級段階においては、今まで通ってきた段階の学習を一層みがきあげて、最高段階へすすむ足がかりとなし、徹底的に学習する、即ち、集中方式の段階である。“目先きの成功”に気をとられないで、自分自身で何でもってやろう”という気がまえをもつべき段階である。今までの“与えられる”という学習法より、“自分でもぎとる”という方法に変えねばならない。

さて、この段階では、いままでやってきた練習法に、出来る限り機会をつくって、先づ“自分の口で発表する”という気持ですすめていきたい。自分の身の廻りにある凡ての物が教材となりうるのであるが、順序よくまとめるために、一番よいと思われる学習法を十項目とりあげて私見をのべていきたい。

1. What would you say ?
2. Colloquial English
3. Situational dialogues
4. Dictation
5. Recitation
6. $\frac{1}{2}$, or one minute talk
7. Group discussion
8. Speech
9. Radio, Television, Film などを、見たり、きいたりしたものに対しての話し合い又は討議
10. Newspaper

以下 略

上記に挙げられた10項目は此の段階で最もよい学習材料であるし、又案外に興味をもってとりあげられる材料である。先づ、第一項目の、1. What would you say ? については、簡単なものよりはじめて

口を慣らしていくとよい。

- a. What would you say when you meet your teacher in the morning ?
- b. What would you say when you meet your friend after a long interval ?
- c. when you want to open the window ?
- d. when your American friend asks you how you cook rice in your country ?
- e. You have lost your umbrella in a supermarket in Kyoto. You go to the Lost Property Department at the Supermarket and report the loss precisely, describing what parts of the store you have visited. What do you say ?
- f. when you hear someone running behind you on the street and calling.

A lady hands you your glove which you dropped ? etc.

とっさに答えが出るようになるためには、やはり練習が必要である。やさしい文章より徐々にむづかしい長文へと移っていき、口をなれさす事である。慣れるにしたがって余裕が出来てきて、答え方のテクニックが身についてくるようになる。あとは、あてがわれたものだけでなく、自分で材料を選び、たえず練習すべきである。従ってこの項目の目的は、目にとらえたもの、又は考えついたものを即座に外国語(英語)で考えてみるということと、それをためらわないで、すぐに口に出してみるという習慣性をやしなっていくように指導し、努力させていくことである。中期段階の Practice through picture によって、外国語(英語)で表現する方法になれているとはいえ、耳から耳へと直接にはいつてきた音声はききにくい場合もある。普段の生活の中で自国語を話すと同じように、外国語(英語)で話してみるという習慣形成こそ目的達成への道である。

2. Colloquial English

単語を数多く知っていればいる程、外国語(英語)につよいといわれるのは、昔も今も変りないが、自分の頭にたくさん単語がつまっているからといって、それで意志の伝達がうまく出来るということにはならない。勿論、語彙力が豊富であれば、話しをする時にも、活字にあらわすときにも、大変に有利であることは疑いないが、然し、それがすぐに意志の伝達に役にたつという考え方は少し、安易な考え方であると思う。人と人との対話の際に、頭の中に入っているむづかしい単語をならべたてて話してみても、相手に理解させることが出来なかったら何にもならぬことである。専門的な文章をかく場合には通用している単語も、会話をなす時の話語としては駄目な場合もある。此の段階は、その正しい使い方を勉強する段階でもある。語彙力が豊富な人ほど、又とまどう場合も多いと思う。一つでもたくさん単語をおぼえようとする努力を、少しでも通じる単語を勉強しようという気持ちに変えることが大切である。Wait a few minute, please. といわれると、そばにおいてある椅子に、とっさに座するという行動が出来ても、Wait in a couple of minute, please. とだしぬけにいわれると、a couple of, a couple of, と一しゅん首をかしげるかも知れない。これは、一通りのいいまわししか頭に入っていなかった故であるが、ききなれ、使いなれが如何に大切であるかがよくわかる。英国人はよく actually を使う。

I am a bit early, actually. actually という語意の, at the present moment, in fact, really, as a matter of fact, などの意味であるが, ほんかるい, 口ぐせであるという使い方をしている。私共, 日本人にはききなれないせいか, 耳ざわりな言葉とうけとれる。a spot of lunch, snags, teeny bit, Jolly good, It cost a packet. I can't make head nor tail of, など 筆者の頭をかしげさしたものであった。その国で使われている Colloquial English (話語) の勉強も 意志伝達を目的とする外国語 (英語) の大切な学習法の一つである。

3. Situational Dialogues

Colloquial English と同様に, 日常の生活に使用されている, いわゆる日常会話の練習 (Situational Dialogues) の消化も, 此の段階における着実な学習法の一つであり, 意志伝達の基本につながるものである。

A. Good morning, how are you ?

B. Very well, thank you and you ?

A. Quite well, thank you.

Would you care for a cup of tea ?

B. Only if you've having one.

A. Do you take milk and sugar ?

B. A dash of milk and two lumps, please.

A. Help yourself to a cigarette.

B. No, thanks. I'm trying to give up.

A. Come on. I insist.

B. No, really, thank you.

I've got a bit of a cough.

日常どこでも話される会話である。出来るだけたくさん話し方を身につけて, 応用していかなければならない。此の Situational Dialogue より, 話しがはずみ, 人生論などに波及していったとすれば, すばらしい事である。人と人との交りが出来あがっていく基本である。決して, おぼえただけにとめておかない事である。表現の仕方をおぼえただけでは用は足りない。

4. Dictation

音声をきいて, すぐにそれを文字にあらわすという Dictation の作業は, 案外に, 学習者達にうとまれがちであるが, “耳”ででき, 即“理解する”, そして文字にあらわすという一挙兩得的な此の学習方法は, 是非とも修得しておかねばならない。耳にいれた音声と, かかれた文字が一致すると興味が湧き, その反面に, きいた音声とかかれた文字がちがっている場合がっかりする練習法であるが, 集中力と正確さを培う為には, かかすことの出来ない練習の項目である。但し, 大切な事は, きいてかくだけの“かきっぱなし”ではいけない。必ず, かかれた文章を教材となして, 多方面より質疑応答をなしてしめくくりを

なしておくべきである。練習したものを完全にこなしておくことが、この Dictation の本命である。正しくかけないという事は、話されている事が理解されていないという事にもつながっていくので、音声の catch には十分な練習が必要である。ちなみに、The Pied Piper of Hamelin の一節をとって、Dictation 練習の過程をみてみたい。

A long time ago Hamelin, a little German town, was covered with rats, which annoyed the people very much. The rats were everywhere, — in the houses, in the streets, in the stores. etc.

子供達に愛されている、“ハメルンの笛吹き”の一節である。大変やさしいものであるが、最初より、速度を出さないで、学習者達に、やさしいという気持をおこさせて、きんちょうをといてやるようにしていく。

- | | |
|---------------------------|---------|
| 1. model reading | = 普通速度 |
| 2. one sentence ずつゆっくりと読む | = 筆記の開始 |
| 3. 二回目、やや速度を出して読む | = 筆記の訂正 |
| 4. 三回目、普通速度で読む | = 訂正の終了 |

かき取りが一応おわったところで、再び、はじめから、ややゆっくり読んでやり、句読点等に注意をさせながら、最終的な訂正をさせる。尚、dictate 中に、わからぬ単語にこだわっている時は、その部分をブランク又はまちがったままにさせておき、あとで各自のわからない単語を発表させていくようにする。その際、理解できていない単語は板書などにより確実に訂正させるようにする。短文であれば 10 分～15 分、長文であれば 20 分～25 分位の時間をあたえ、group でも、席の隣り近所でもよし、協同作業で意味をとらせておく。その後、one sentence ずつ又は、one paragraph ずつで質疑応答に入り、全文把握につとめさせるようにする。最後にどれ位把握しているかを確認する為、ノートなしで物語を自分の言葉になおさせていわしてみる。又は home work として、50 語～70 語以内位の作文を課するのもよい。この Dictation の長所は、きく耳が強くなるばかりでなくて、学習者自身の weak point になっている音などを見つけだす事が出来るし、又音声をきく自分の耳の強さ、弱さを知るよい機会であるという所にある。

quite — quiet, work — walk, effect — affect, pail — pale, route — rout, girl — gull などのまちがいがやすい音も、口腔器官を正確に使用し、正確に音声をきく努力と習慣がついてくれば、ある程度、充分でなくても、正しく“音声”をとらえることが出来るものである。従って、耳の訓練が出来ていれば、文字にあらわすことも容易であるということになる。不得手とされている L 音や R 音も、音をきくという基礎的な訓練がよく出来ていれば、さほど心配することはないのである。有声歯茎そり舌摩擦音 (Voiced alveolar retroflex fricative) の R 音とか、有声歯茎音側面音 (Voiced alveolar lateral) の L 音などは、日本語にはないので、“出来ない音”ときめつけないで時間をかけて練習すべきである。

Dictation の練習には、上記の要素が最も必要なことである。そして、此の dictation の練習を通して、“きく”、“話す”、“かく”、の総合的な練習をすべきである。

5. Recitation

中学生の頃、暗記した童話とか文章などは、一度おぼえこんでしまうと、中々忘れようとしても忘れられないものである。おぼえこんだ文章は宝物みたいに、何時々々までも、胸の奥そこにしまいこんで、何かあると口ずさんでみるものである。Recitationの練習のよさはここにある。おぼえこむまでは苦労が多くても、一たんおぼえたあとは楽しさだけが残るものである。一つの題材で、然も頭の中に入れこんだ材料で学習する楽しさは、自信をもって立ち向うことが出来る。正しい指導のもとに、数多くの文章をおぼえこんで、其処から、語彙、句、節、accent, intonation, 表現法と色々な事を学んでいくことが出来る好適な材料である。練習の方法も又楽しく考案して、自分自身でやってみるのもいいし、pairを組んだり、又groupなどでやってみるのもよい。いづれにせよ、此の段階における、ないがしろに出来ない練習法の一つである。

6. One minute or $\frac{1}{2}$ minute talk

この項目は学習者が今迄べんきょうしてきた総合的な知識をみるのに大変よい方法である。すかさず応対できるという態度は、練習のたまものであって、自らもっている語学力の才能であるとは決して限らない。此の才能を使わずにしまっておくと、いわゆる宝のもちぐされとなってしまう。練習によってみがきあげられてこそ、本当にその才能が光ってくるものである。時間的に非常に短かいので、ウロウロと考えている暇に時間がたってしまうので、とりあえず、思った事をサット外に出してしまうことである。話しの中心をつまむことは、大変むづかしい事であるが、一に練習、二に練習、三に練習の効果で、知らず知らずの間に機敏さを身につけていくものである。教材は、それこそ、そこらあたりにころがっている。自分で努力して、早く中心をつまむコツを会得することである。やっといえたたった1回の成功は百回の成功と同じ成果である。うまず、たゆまず自習できるこの項目で、1分間から3分間へ、又10分、20分、30分と時間をのばしていつて talk することに慣れていくことである。勿論、中期段階で練習してきたが、上期段階においては与えられる内容の繰返しではなく、自らつくりあげる文章でなくてはならない。さて、春(Spring)という題で何か話せといわれたら、

1. 暖かくなる。
2. 人々の顔がほころんでくる。
3. 桜が咲く。
4. ハイキングに出かける。
5. 鯉も池の面に出て泳ぎ出す。

など、頭にうかんでくる事は十人十色だと思うが、このように自分のいわんとなることがすぐ頭にうかぶという事はやはり練習のたまものであると思う。あとは、どのように表現するかである。あと一歩という所であせってはいけない。じっくりと練習にはげむべきである。話そうとする一分間はとても長いものである。先づ、何を話そうと考えこんでしまうものである。然し、1度、口の外に言葉を出してしまえば、後は案外とスムーズに文章が出てくるものである。此の項目の成功は、努力と練習に外ならない。

7. Group discussion

Dictation, Recitation, $\frac{1}{2}$ or one minute talk の学習法にもう一つ、駄目おしの勉強方法である。相当に慣れてきている、耳、口などを使って、自由な構想のもとに、ある題目について討議する時、今までやってきた勉強の成果がよくあらわれ、自信と興味で練習をする事が出来る。但し、此の項目は、内気でひかえ目の性格がそうさせるのであろうが、案外と日本人にとっては、苦手だとまれがちである。はずかしがって、あまり発表したがる傾向があるが、あつかましく、積極的に又大胆に活動すべきである。しばらくの間、内気ではずかしがりやの日本人気質をすて去ることである。このような事情をふまえて、必ず、一人一発言の指導をしなければならぬ。たとえ、人と反対の意見であっても、自信をもって発表させるようにする。一言しゃべるという態度をもつことが一番大切な事である。group から、はじきだされるような事はしないことである。会話のコツというものを早く会得したいと思うなら、おくせずに早く口に出すという態度をもつべきである。

8. Speech

$\frac{1}{2}$ or 1 分間 talk の練習より、時間の制限のない group discussion へと、会話するという技術の会得のために、おおきく移行していくが、これらよりえた知識や話術などをいかして、自分の好みの題材をえらび、人前で5分乃至10分間の speech をなして自分の“話す力”にみがきかけるようにする。Speech は自分の話している内容が、本当に相手に理解させているかを見るのによい練習方法である。Speech というものは、自分だけが準備してきた題材で勝手にしゃべればよいというのではなくて、十分な知識をもって、自分の Speech に対する質問に受けこたえをしなければならない。如何にうまく質問をさばくかが、自分の Speech に対する評価であると思う。日本人が“日本”について話しをする時、どの位相手に理解させることが出来るか。日本は島国で、周囲を海でかこまれた風光明媚の地であるというだけでは満足させることは出来ない。具体的に、日本の面積は369,661 km²、人口は約9341万8501 (1960年調べ)、又日本列島は4島(北海道、本州、四国、九州)より成り、其の他、数多くの島がある云々と具体的なものをかかげて話しをしなければいけない。したがって、Speech というものは、知識をふまえての学習であるので、相当な努力が必要となってくる。このような“知識”とか“話す”ということが、人と人との communication につながっていくのである。Speech の第一条件は、自分の話さんとするものについて充分な予備知識が必要であるという事がよくわかる。又、自分だけが話しをするのではないので、相手の話していることに耳を傾け、話し言葉、表現法又は話しかたのスピードなどをききとる努力をしなければならない。Speech する回数が多くなればなる程、度胸がついてきて、ものおじしなくなってくる。

9. Radio, Television, Newspaper

上記の mass communication を通しての勉強も“話す技術”、“話される速度”、や“話されている言葉又は書かれている言葉や表現法”などのよき教材である。多重放送になって、news も英語でできるテレビの時代になってきた。将来、news だけでなく、色々な物が英語でなされるようになるかも知れない。大いに応用して、さく耳をならすべきである。時たま(めったに行きあたらないが)、日本語の吹きかえ

なしの洋画がテレビで上映されたことがあるが、耳の訓練には本当によい教材である。若し、台詞が出ていけば、なるべくみないようにしてきけばよい。外国人の話す natural speaking と speed になれていくことである。Language Lab. が容易に利用できるといいが、設備がない場合は、tapeなどをきいて耳の訓練をすればよい。要するに、radio, television, English newspaper の mass communication などから得られる教材はもとより、上に附加した、Language Lab. や tapeなどを大いに活用すべきである。

10. Film

外国語(英語)の勉強には洋画(勿論、日本語に吹きかえられていないもの)を見て、耳の訓練をする、早く身につくといわれるが、その理由は、少々話されている文章が理解できなくても、目の力を借りて、動作などで意味をくみとっていくという所にある。楽しみながら英語が出来るということである。但し、一回位の鑑賞では不充分だと思う。したがって、一回目はパンフレットを見ながら鑑賞し、二回目はなしで、三回目はどの位、頭の中に入っているかをもう一度確認するために見るという努力が必要であろう。同じものを三回見るという事は随分と辛抱のいる事であるが、その成果は大である。美しい音楽、その音楽と共に進展していくロマンチックな story、自分自身を映画の中に投じて学ぶ極く、自然的な学習法の一つであろう。

以上、10項目につき簡単な説明を附してきたが、此の他、練習教材となるものは色々ある。例えば、街を歩いている外国の観光客と接するのも、活きた教材としては最高なものである。但し、接するという機会はそうざらにはないものだけに、勇気と自信を以てその機会を有効につかねばそんである。注意しなければならぬことは、折角の機会にめぐりあっても、まるで尋問しているような話しか出来ないというのは考えものであるが、下記のような質問に終るのはさけるべきであると思う。

Where did you come from ?

What is your name ?

Where are you going ?

How long will you be here ?

What do you think about Japan ?

What are you doing in your country ?

etc.

上記のような、ポツンポツンとされる雨だれ式質問はさけて、なるべく、実のある話題を身につけるよう努力しておくべきである。外国人に接する場合には polite すぎてはいけないうし、又 shy であってはならない。機会があればどんどん活用していくという気力をもって立ち向っていかねばならない。又、時間と費用がゆるされるならば、いままでの学習の成果を、英語を話す国にいて、たとえそれが二週間位の短期間であっても、そこで研修し学んだものは、いままでの学習に大いにプラスされると思う。

さて、以上のように、上級段階における学習方法を、一番いいと思われるものをあげてのべてきたが、

絶対的なものではない。ただ英語を勉強していくうえで、大変、必要な学習段階であると思う。本当につかえる英語の修得には、このような段階を着実に登っていくべきである。ウサギとカメの競争のように、まけると知っていても、無理をしないで、自分の出来る範囲で、一生懸命に努力して goal-in したカメの心意気と同じものである。物には順序があるように Step by Step の精神で、丁度、長距離マラソンをする時のような、“孤独で苦しい”競争にぶつかっていかなければならない。

以上のべてきた事は経験を通しての(教える経験, 学ぶ経験)の私見であった。目的は学校教育における外国語(英語)の指導法であるので、新しい工夫の教案で危ぶみながらいくよりは、今までやってきて、一番よかったと思われる教案をつかって、心豊かに勉強していく方が、指導者にも学習者達にも無理がいかないで身につけていく事が出来ると思う。然しながら、“経験のみではいけない、科学的であれ”といわれている今日、これから先きの段階、即ち、Advanced Course における総仕上の段階においては、科学的に創意工夫された新しい教案が望まれてくると思う。又それに向って、努力していきたいと思っている。

指導者と学習者のたゆみなき努力と忍耐が、めざすゴールにとびこんでいけるということをしるして、此の言語教育(初級, 中級, 上級の各段階)の指導法の項を終りたいと思う。

参 考 図 書

英語音声学概論

小 栗 敬 三 著

英語音声学

笠 原 五 郎 著

A Hand book of Free Conversation

Colin Black

What would you say?

L. A. Hill

Colloquial English

Michael Coles and Basil Lord

Situational dialogues

Michael Ockenden

其の他 研修記録より